

小学校低学年児童における読書量、語彙力、文章理解力の関係

猪原敬介（福井大学 医学部 学術研究員）

■研究計画立案の背景と研究目的

児童の語彙力および文章理解力は、国語のみならず全ての教科の学習における基礎となっており、これらの能力が十分でないと学力全体が低く留まるリスクを負う。児童の語彙力・文章理解力を高める方法として、読書活動の促進という方法がある。しかしながら、読書、語彙力、文章理解力の関係についての先行研究は不足しており、教育者（保護者や学校教員）が効果的な読書指導を行うのに十分でない。

本研究の目的は以下の2つである。①最も妥当性が高いが簡便でない図書貸出数と、より簡便な5つの読書量推定指標（読書時間、読書冊数、生活時間帯調査、活動選好調査、タイトル再認テスト）との一致の程度を検討し、妥当で簡便な読書量推定法を探索する（方法論的貢献）、②読書量が語彙力と文章理解力に及ぼす影響の発達の変化について検討する。例えば、「読書量が文章理解力に影響する」と言うとき、読書量が直接的に文章理解力に影響する直接効果と、読書量が語彙力に影響し、その語彙力が文章理解力に影響する間接効果の2種類が考えられる。それぞれの直接効果と間接効果の関係が、小学校1年生から6年生へと発達段階が進む中でどのように変化するかを検討する（理論的貢献）。

■研究方法

◇参加者 公立小学校2校、私立小学校1校の1～6年生児童992名が調査に参加した。

◇材料

図書貸出数 小学校での児童の図書貸出冊数の提供を受けた。

読書質問紙 読書時間、読書冊数、生活時間帯調査、活動選好調査を含む質問紙を新たに作成した。

タイトル再認テスト 実在する本のタイトルと実在しない本のタイトルを混在したリストを参加者に渡し、知っているタイトルに○をつけさせるテスト。知っているタイトルに正確に○をつけられる程度を読書量推定値とする。日本ではこれまで使用されたことがなく、本研究では初めて日本児童版（1・2年生用、3・4年生用、5・6年生用の3種類）を作成した。

語彙力・文章理解力テスト 標準化されたテストであるReading-Test 読書力診断検査(福沢 & 平山, 2009)を用いた。

■結果・成果・今後の課題

◇図書貸出数の代替となる測定指標の探索（方法論的貢献）

図書貸出数と他の読書量推定指標との相関係数は総じて低く、少なくとも小学校児童に関して、図書貸出数の代替指標として用いることのできる簡便な測定方法は存在しないことが示唆された。タイトル再認テストは欧米圏で標準的に用いられている指標だが、図書貸出数との相関係数は低いことが示された（1・2年： $r=.13$ ；3・4年： $r=.11$ ；5・6年： $r=.31$ ）。

◇読書量が語彙力・文章理解力に及ぼす影響の発達の変化についての検討（理論的貢献）

図1は本研究の分析結果から示唆される読書量から語彙力・文章理解力への影響をモデル化したものである。小学校低学年（1・2年）の時期は、読書力は直接的には文章理解力の向上には貢献せず、読書量から文章理解力への影響はほぼ完全に語彙力を経由したものであった。中学年では、読書量は語彙力と文章理解力の双方に直接的に影響する。高学年になると、読書量は直接的に文章理解力の向上に寄与する一方、語彙力には文章理解力を経由してのみ影響した。

本研究の結果は、学年によって読書の持つ意味が異なることを意味しており、読書を用いた言語教育への示唆も大きい。例えば、小学校1・2年生では、読書は主に語彙の発達に重点を置いた行為であり、教育者は無理に文章全体を理解させることよりも、ある単語はどのような意味であるかを児童にしっかり理解させることが望ましいと考えられる。一方、5・6年生では、文章そのものをしっかりと理解させることで読書によって文章理解力は伸びるであろうし、文章理解力を經由して語彙力も伸びることが期待できる。

以上のように、本研究は読書に関わる学術研究への貢献および読書を用いた言語教育への応用の面で意義づけられる。

